

会議結果報告書

令和8年1月30日

会議の名称	令和7年度 第3回 舞鶴市発達支援体制検討会議	
種別	<input type="checkbox"/> 附属機関 <input checked="" type="checkbox"/> 懇話会等	
開催日時	令和8年1月8日(木) 14時00分～16時00分	
開催場所	舞鶴市中総合会館3階 集団健診室	
出席者	委員:小谷裕実、村田淳、四方あかね、橋本由紀、阪口靖敬、金子亜佑美、石黒健太 関係者:楠崇智、仲川真広、足立典子、西邑公子、梅田めぐみ、村尾茜 事務局:瀬野勝久、尾橋淳子、飯田美和、野田諭史、日下部亘、守屋和行、鎌部晶子、後野香織、小森昌子、栢分美香、真下知子、堀井由美子、植田葵、内藤恵美	
議題	(1) 第2回 舞鶴市発達支援体制検討会議の報告 (2) 意見交換 ・発達支援パスについて ・保護者支援のあり方について ・連携と適切な役割分担について	
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 部分公開 [理由]	
傍聴者数	2名	
審議結果及び主な意見等	別紙参照	
会議録の作成様式	<input type="checkbox"/> 詳細 <input checked="" type="checkbox"/> 要約	
備考		
担当課	舞鶴市 健康・子ども部 子ども家庭しあわせ課 TEL (0773) 68 - 9155	

令和7年度第3回 舞鶴市発達支援体制検討会議 議事録【要約版】

1. 開催概要

日時:令和8年1月8日(木) 14時～16時

場所:舞鶴市中総合会館

参加者:(敬称略)

委員:小谷裕実、村田淳、四方あかね、橋本由紀、金子亜佑美、石黒健太、阪口靖敬

関係者:楠崇智、仲川真広、足立典子、西邑公子、梅田めぐみ、村尾茜

2. 議事

議題1:第2回舞鶴市発達支援体制検討会議 報告(省略)

議題2:発達支援パス(見直し案)の説明と意見交換

【保護者ヒアリングの結果と課題】

- **不安が最も大きい時期:** 就園までの幼児期が最も不安であり、専門家への相談機会の少なさや、他児との比較による精神的負担が大きい。
- **支援の切れ目:** 特に高校生(思春期以降)の相談先に関する課題が多い。
- **社会資源の不足:** 病児送迎、余暇活動、兄弟の預かり先、居場所などの供給量が不足している。
- **手続き・情報提供の負担:** 窓口の一本化・簡素化が望まれる。また、保護者が疲弊しており、情報収集のエネルギーがないため、市からの情報提供が重要である。
- **保護者交流:** 保護者の交流は孤独感や不安の軽減と見通しを持つ点で有効だが、働き方の変化により交流の場への参加が困難な状況がある。
- **支援者に求められること:** 特性を伝える際の配慮、保護者自身の気づきを支える「やわらかな声かけ」、関係機関間の情報共有と共通理解が必要である。「何かあれば相談を」という声かけではタイムリーな相談に繋がりにくい。
- **発達支援ファイル:** 記入の精神的負担が大きく、学校での活用経験が少ないため、支援者側によるファイルの確実な認知・活用が求められる。

【発達支援パスの見直し案の提案】

- 保護者の不安解消や道しるべとすることを目的とする。
- 人生の歩みを「一本の道」で視覚化し、「心の声の吹き出し」から相談先へダイレクトに繋げる構成としている。
- イラストを多用して情報収集の負担を軽減し、「発達支援ファイル活用」を促す構成としている。

【委員からの主な意見・提案】

- **内容・デザイン:**
 - 保護者の心情(心の声)から、相談先(連絡先)へ直結するシンプルな構成にする。
 - 相談のハードルを下げるため、連絡先には「受付時間」を記載することが必要である。
 - パスとは別に、詳細な情報への導線として、よくある相談やサービス一覧を作成し、個別のサービス内容がわかるページへリンクを設定する。
 - 放課後等デイサービスに、療育だけでなく就学後の預け先としての側面についても追記が必要である。

- 高校生以降の進路選択を支える社会資源として、若者サポートステーションなどの資源も記載する。
 - 保護者からの聞き取り結果に、体調不良時に特別支援学校のバス停への送迎希望があったことから、移動支援事業の記載も必要である。
 - 子育てや教育の資源不足を社会福祉の資源が補完する側面があり、居宅サービスや移動支援などの福祉サービスも記載する。また、ソーシャルワークの視点を組み込む必要がある。
 - イラストにおいて保護者役が女性に偏るなどの「ジェンダーギャップ」への配慮が必要である。
 - 支援ありきではなく、支援が必要となる前の段階から相談ができるように「子育てのパス」のようなイメージの構成が望ましい。
- **配布・活用：**
 - 必要な方への配布にとどまらず、対象者を限定せず、「出生後から誰もが目にできる」形で配布・設置することで、地域全体の理解促進に繋がる。
 - 紙媒体だけでなく、舞鶴市のホームページからダウンロードできるなどデジタル版での提供を進める。
 - ホームページに掲載する際は、個々の困りごとにより、子育て・障害・福祉・教育などどこから入ると情報にたどり着けるかわからないため、情報にたどり着きやすい工夫が必要である。
 - 自分のこどもであったとしても、必要な社会資源を活用しながら親も余裕を持ってこどもに関わることができるという雰囲気が地域の中にあると、社会福祉の利用が進みやすくなる。
 - 学校教員の中には生まれてからの支援の道筋を知らない人も多く、パス（ロードマップ）のようなものがあれば、卒業後の見通しが持てる。

議題3：保護者支援のあり方についての意見交換

【心理面】

- マニュアルではなく、支援者が個々の保護者に想像力を働かせ、寄り添うこと。また、不安を話せる環境や成長をともに喜びあえる人の存在が必要である。
- 支援者には、保護者がこの人が言うならと思える専門性が必要である。
- 保護者同士の繋がりも、悩みを持つ保護者にとっては力になる。しかし、現状では支援が必要なこどもが自分のペースでゆったりと活動できる場が少なかったり、保護者が周りの目を気にして、公共の施設での活動に消極的になったりして、保護者同士の交流が少ないと感じる。保護者の不安や孤立感を軽減するため、インクルーシブな空間や、支援が必要なこどもだけが利用できる日を設定するなど、保護者同士やこどもが交流できる場を増やすことが必要である。
- 保護者にとって、年齢毎の発達を目安と自身のこどもの発達とのギャップが心理的な負担になる。社会全体の「同質性（みんな同じであるべき）」という前提をどう解決するかが根本的な課題である。

【養育負担の軽減】

- 親には親の人生がある。養育負担の軽減には、「自分のこどもだから親が面倒を見る」というマインドセットから脱却し、「使える権利を知り利用する」という社会資源の有効活用が重要という地域社会の雰囲気作りが求められる。

【保護者も支援者であるという視点】

- 専門職は「保護者が一番の支援者です」という言葉が結果的に保護者の負担を増やす可能性があることを認識し、「保護者は保護者でいてほしい。保護者には親としての役割を期待し、専門職の役割は求めない」という姿勢も大切にすべきである。
- 家庭をソーシャルワーク的な視点で捉え、親だけが抱え込まない構造を設計する必要がある。
- 保護者の考えや見えているものを尊重しつつ、孤立を防ぐため、保護者に対し「こどもと支援者をつないで欲しい」と伝え、窓口を閉ざさないよう促すことが重要である。
- 特に乳幼児期や思春期・青年期に、こどもへの関わり方に悩む親が多く、幼児期にペアレントトレーニングを学び、その知識が成人後も役立っているという保護者がいらっしゃるから、基本的な知識やスキルを身につけることが重要である。

議題4：連携と適切な役割分担

【現行の連携体制の課題】

- 連携が園と小学校、小学校と中学校など「2者間での連携に限定」され、園や小学校からの情報が高校まで繋がりにくい。
- 接続で用いる「3点セットの様式が不統一」である。
- 放課後等デイサービス事業所への移行支援の仕組み化が必要である。

【連携強化の工夫】

- 多機関での情報共有には、必要な情報だけを直接やり取りすることが最も分かりやすいが、それだと二者間での共有に留まってしまうため、連携強化のためには社会に出るまで一貫して情報を閲覧できるようにすることが必要である。このため、移行書類の様式統一とDX化による情報の一元化を推進する必要がある。また、これと並行して、情報の流出・漏えいを防ぐためのセキュリティ対策、および利用者が適切に情報を扱えるようにするための利用手順の統一も同時に進める必要がある。
- 学校現場における様式統一の取り組みは、これから検討することとしている。
- 様式統一の方法については、特別支援学校の様式が参考になるのではないかと、データ移行の負担軽減のためにAIの活用が必要かなど、様々な手法を思案している。
- 様式の統一やDX化の範囲が学校現場に留まらず、さくらんぼ園やこども園など、関係者全体で共有・活用するとすると、誰が主体となり、どのような場所で、どのように推進していくのか、検討する必要がある。
- 放課後等デイサービスの認知度が低く、見学にまでたどり着いていない場合があるのではないかと。申請書類の様式や保護者の同意書の統一と合わせて、利用対象者などの情報浸透が必要であり、園・保育園ベースで周知徹底を行ってはどうか。
- 放課後等デイサービスを探す際の負担を軽減するため、親が見学時間を確保できるよう、例えばファミリー・サポート・センターの利用助成（例：お試しチケット）などの仕組みを作ってはどうか。これにより、ファミサポの周知にもつながる。
- 連携先として、放課後児童クラブへの移行支援も視野に入れる。
- 支援ファイル（パス）の運用については、小学校や中学校の途中から必要になるケースもあり、誰がファイルを用意し、誰にどう渡すかという運用方法や、ファイルが膨大になった際の整理整頓など、現場での課題が山積みである。
⇒現在、ファイルは乳幼児教育センターが作成し、主に就学までに配布しているものの、運用が曖昧になってきており、明確化を進めている段階である。
- それぞれの関係機関がどのように連携していけばいいのか、手続き等も含めて連携の筋道が周知されていることが大切である。
- 地域連携については、「顔の見える関係を作るしかない」。現在、「HEAP」というプロジェクトに取り組んでおり、大学生で発達障害のある人が利用できる地域資源や相談機関のリストを作って、なるべく簡単に紹介している。リストは、ダイジェスト的な一覧であり、詳細

仕様はそれぞれの窓口のWebサイトで確認できるようにしている。QRコードを付けてスマートフォン等でも閲覧できるように工夫している。

- また、リストだけではイメージが湧きづらいことから、マップも作成している。舞鶴の地域マップに情報を落とし込むことで、「すぐ近くにある」という親近感を持ってもらえるのではと思う。
- さらに、年に1回、情報更新を行っているが、その際に、地域の医療機関、支援センター、就労系事業所など、多様な関係者が参加する「ラウンドテーブルミーティング」を実施している。このミーティングでは、具体的なケースを題材にいくつかテーマを設定し、「うちの事業所ならこういうことができる」「うちでは対応が難しい」といった福祉サービス、医療機関、学校などがそれぞれの立場からどのように対応できるかを話し合い、お互いの取り組みや役割の相互理解と交流を深めており、こうした取り組みは、連携強化に有効である。

3. まとめ（小谷会長）と次回について【まとめ】

- 支援パスは、温かみのあるイラストで相談のあり方の「見える化」に成功し、多くの具体的な意見を引き出すことができた。
- 保護者支援については、保護者の聞き取りの結果も報告され、それを受けてディスカッションできた。子育てが保護者だけに押しつけになっていないか、社会で子どもを育むとの視点を含めて再確認できた。
- 連携については、放課後等デイサービスを中心に議論を行ったが、古くて新しい重点課題である。できているところとできてないところを曖昧にせず、「いつ、誰が、どこで、何をするか」を具体的に進める必要性を確認した。これにより、各委員が互いの責任の所在を確認し、自分たちにできることを日頃の取り組みに活かしていけると思う。
- 全てのこどもと保護者に対し、障害の有無に関わらず、ホームページや携帯電話などを活用した「情報の入手のしやすさ」を今後検討していく必要がある。

【次回会議への申し送り事項】

- 今回の議論で時間が不足した「連携と適切な役割分担」について、さらに深掘りする。
- **次回のテーマ：**各機関が担っている役割や連携体制として不足している部分などを、どのように相互に補い合っていくのか、具体的なアイデアとご提案を依頼。
- **日時：**1月29日（木） 14:00